

2.4 動植物の分布状況のまとめ

2.4.1 横断面的な生物分布状況の特徴

- ・ 宍道湖及び中海は、塩分躍層の存在、底質の変化、水中光量等によって鉛直方向に環境が異なっている。
- ・ 湖底に生息・生育する底生動物や水生植物の分布は水深によって変化するという特徴が見られる。

・ 水生植物

水生植物は、宍道湖・中海共に湖岸沿岸域の浅場にのみ生育している。これは光合成に必要な光量との関係で規定されているものである。

・ 底生動物

底生動物は、塩分躍層や底質の関係で分布が規定されており、特に塩分躍層の存在は貧酸素化を生じる一因でもある。

宍道湖では水深 4m 程度、中海では水深 3m 程度を境界として、浅場では二枚貝類のヤマトシジミ(宍道湖)、ホトトギスガイ(中海)が、深場ではゴカイ類のヤマトスピオ(宍道湖)、パラプリオノスピオ属 A 型(中海)が優占している。深場に生息する種類は、貧酸素耐性を持ち、泥底に生息するという特徴を持っている。

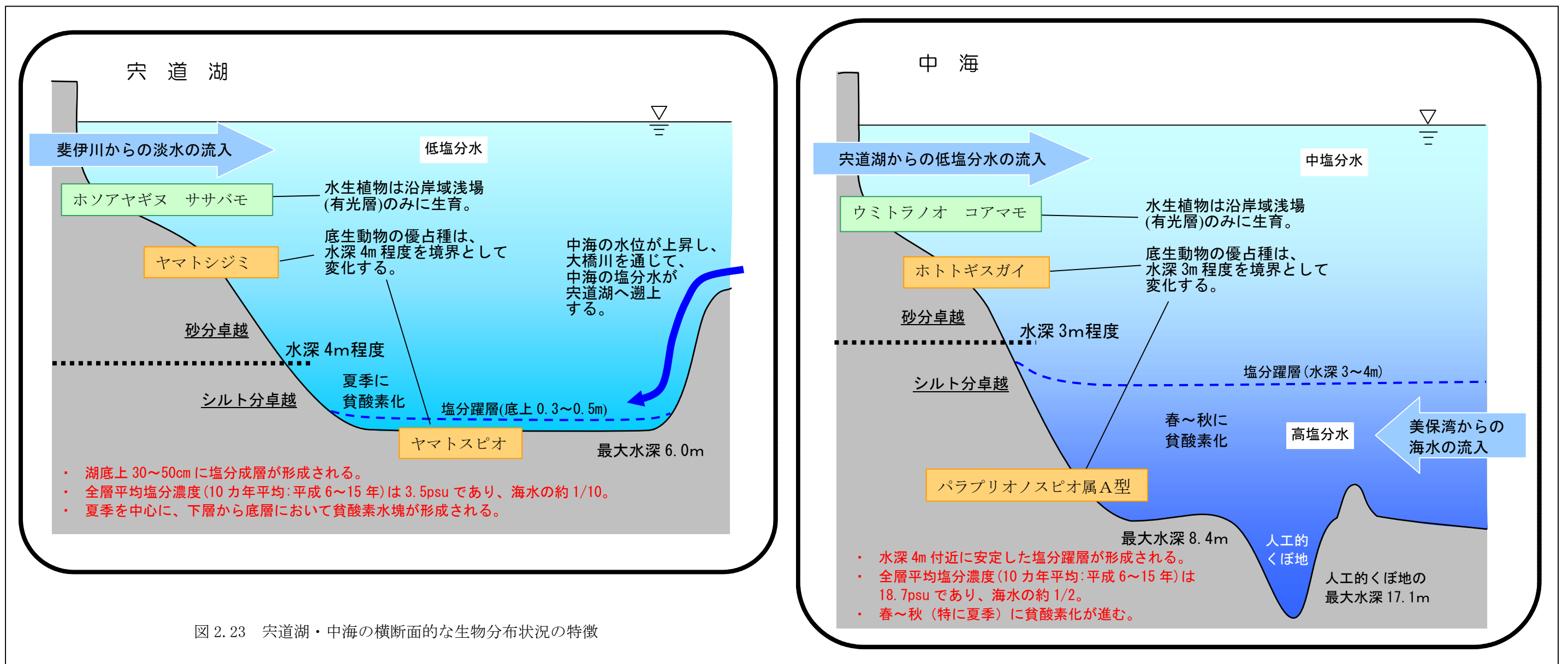


図 2.23 宍道湖・中海の横断面的な生物分布状況の特徴

2.4.2 縦断面的な生物分布状況の特徴

- 本水域に生息・生育する生物の分布には、広範囲に分布するものと、偏った分布をするものがみられる。
- 広範囲に分布する種としては、冬季に飛来するキンクロハジロやスズガモ、魚食性の鳥類、季節的な移動を行う魚類、湖岸に生育するヨシなどが該当する。
- 宍道湖に偏って分布する種は、ギンブナ、コイ、ヌマチチブ、シンジコハゼ、ヤマトシジミ、ヤマトスピオ、ササバモ、ホソアヤギヌなどである。
- 大橋川に偏って分布する種はみられないが、オオクグとコアマモは大橋川において大規模な群落を形成している。
- 中海に偏って分布する種は、ホシハジロ、チチブ、ピリンゴ、ホトトギスガイ、パラプリオノスピオ属A型、オオクグ、コアマモ、カワツルモ、ウミトラノオなどである。
- 境水道に偏って分布する種は、ウミタナゴ、アカオビシマハゼ、アマモなどである。

<凡例>

- ・鳥類
 - 主な生息域
- ・魚類
 - 主な生息域
 - 主な産卵場所
 - 低塩分性種の主な生息域
 - 混生域と推測される生息域
 - 高塩分性種の主な生息域
- ・底生動物
 - 主な生息域
- ・植物
 - 生育域(左岸)
 - 生育域(右岸)
 - 大規模群落

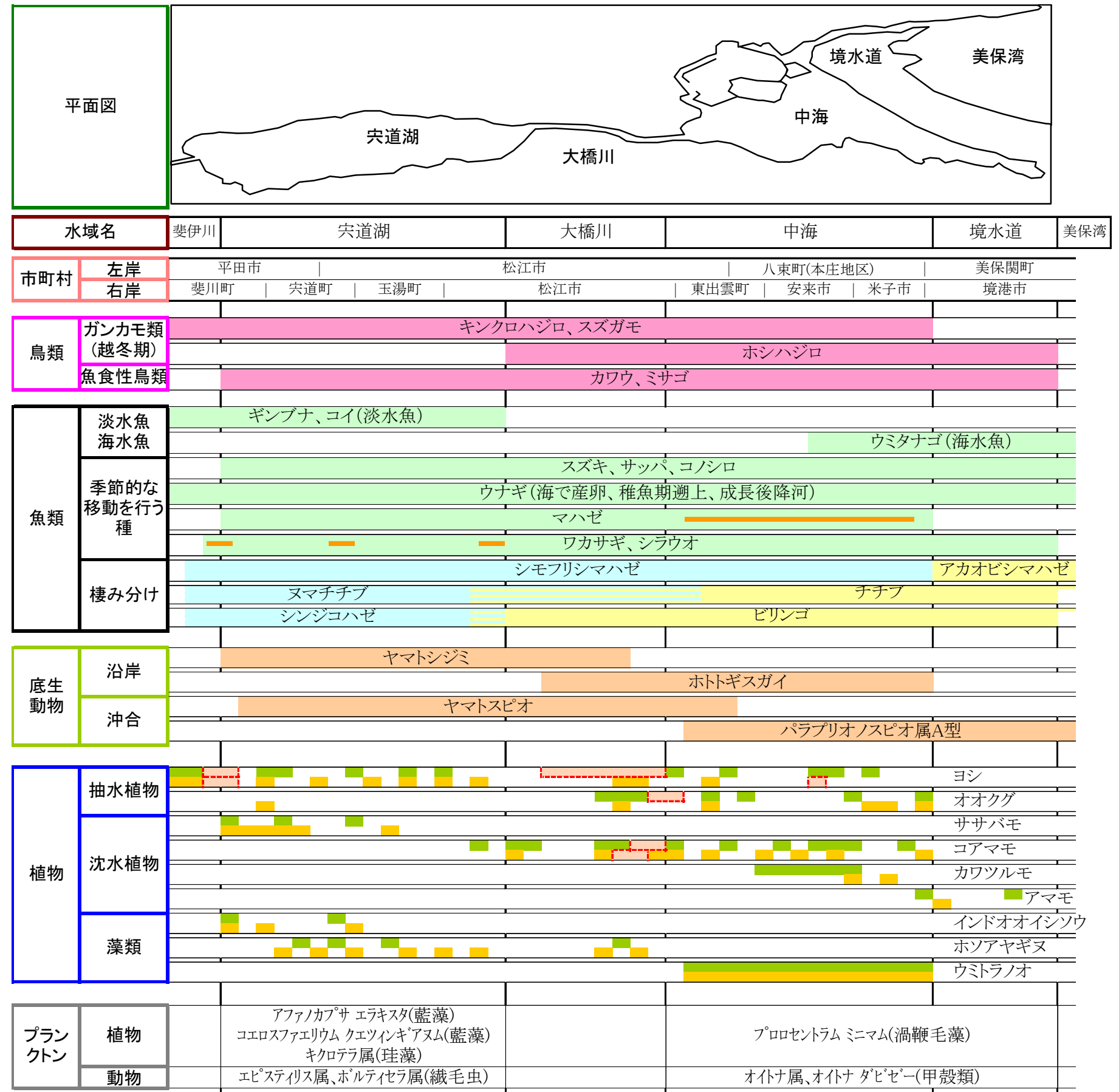


図 2.24 縦断面的な生物分布状況の特徴